

時代を創った男



ヤンカカマと牛山善政社長

葛飾区民記者『かつしかPPクラブ』

隅田 昭

まえがき

取材で欠かせないツールが、撮影用のデジタルカメラだ。

今でこそ、露出やピント合わせなど考えず、誰もが思い通りの写真が撮れるようになった。

だがひと昔前までは、天候や照明などを気にして、撮影に神経をとがらせていたものだ。

記者は中古の「ヤシカエレクトロ35」を愛用していた。



(写真はヤフオクより転載)

この画期的なカメラが、現代の写真文化を創ったと言っても過言ではない。ところが、その「ヤシカ」という世界有数のカメラ会社が、最近目にしないので調べたところ、30年ほど前に消滅していると判明した。

下に掲載した写真は雑誌に掲載された、当時38才と思われる牛山社長だ。セピア風に加工してはいるが、それにしても堂々たる風格だ。

そんな社長も会社もユニークだった、「ヤシカ」の栄枯盛衰に迫った。

もくじ

1. まえがき
2. 世界一の先端企業
3. 華やかな社員たち
4. 暗闇にひと筋の光
5. 異例の工場長抜擢
6. あとがき
7. 栄枯盛衰を見た社



世界一の先端企業

株式会社ヤシカは1949年から83年まで、長野県で精密機器を製造していた。

1971年までは諏訪市、以降は岡谷市に移転する。

昭和30年代から事業を急拡大させ、オイルショックが起きる直前まで、国内販売、輸出とも首位だったが、75年に経営破たんした。



創業当時の下諏訪に伺ったところ、工場跡地は電子機器メーカーが活用していた。突撃取材はNGだったが、関係者の方は「東京の世田谷に本社があり、3Dプリンタなどの先端技術を誇っている」と胸を張る。

かつては近くにオリンパスやチノンなどの精密機器メーカーが建ち、切磋琢磨していた。現在ではエプソンがあり、存在感を示している。

諏訪湖畔にそれらの企業が多いのは、湖の水質が良く、洗浄に適していたのが要因だ。かつては真夏でも涼しく、商品管理もしやすかったらしい。だが温暖化の進んだ現在では、街並みはすっかり変化している。



近隣の商店の方からは、「工場は諏訪大社の上社と下社の通り道にあり、その頃から竜神祭が開催され、多くの観光客が見物していましたよ」と聞かされた。

また三島由紀夫が作った、「愛の疾走」という、恋愛小説の舞台にもなっている。

華やかな社員たち

工場跡地には表紙で掲載した体育館のほか、古い倉庫と見られる和風の建造物が、かろうじて現存していた。

1955年には旧片倉製糸下諏訪工場を引きとり、「ヤシカフレックス」の商標を使用する。片倉製糸は世界文化遺産である、富岡製糸場の財閥企業だ。

66年に発表された、「ヤシカエレクトロ35」だろう。このカメラは35mmフィルムとしては、世界初の電子制御シャッターを搭載していたのだ。

当時はまだ新聞記者や学術研究など、高級一眼レフが常識であり、世界各地に空前のカメラブームを巻き起こした。



ヤシカは快進撃を続け、世界トップの座に君臨する。オイルショックの前年までは、社長を筆頭に従業員が一丸となり、短い春を謳歌した。

72年には岡谷市に本社機能を移転し、絶大な人気を誇っていた女子バレーボールが日本リーグで初優勝する。その当時がピークだった。



諏訪大社まで伸びる旧中山道は温泉宿が並び、浴衣姿の男女が下駄を鳴らしていた。

大衆食堂の方は、「当時は多くの社員が昼食に来てくれました。雨が降ると男性はブルー、女性はオレンジの傘をさし、とても華やかでしたね」と、懐かしそうに語った。

暗闇にひと筋の光



工場跡地の裏側には、御作田社（みさくだしゃ）という鎮守の杜が建ち、地元の農家らしき方が、温泉で野菜を洗っていた。

諏訪大社につづく参道は、かつてヤシカの社員たちも多く通っただろう。下諏訪出身の牛山社長も温泉を飲んだり、湯につかったりしていたのかも知れない。

一代で財を成した牛山善政社長は、1922年（大正11年）に生まれた。両親は観光客を目当てに、当時まだ珍しい洋酒や缶詰を販売する。裕福で笑いのたえない家庭だった。だが、翌年には景気が暗転する。

関東大震災が発生したのだ。観光客は激減し、日本に未曾有の危機が訪れる。一家は昭和に入る直前に借金を抱え、夜逃げ同然に離散した。

牛山社長はまだ6才だった。やがて新聞配達で一家の生計を支えるが、弟とともに教育熱心な母に引き取られたので、かろうじて卒業はできた。

その後中学に上がれず、担任教師の紹介で職員室の給仕をしていたが、親類から京城市（現在の韓国・ソウル）で仕事をしないかと誘われる。

牛山は家族や友人の反対を押し切り、単身で京城の洋品店に住み込みで働く。しかしそこでは、暗い地獄の日々が待っていた。

親類からは、「毎年200円（現在の価値で約60万円）は、貯金ができる」と言われていた。

ところが1日の休みもなく、早朝から深夜まで働かされ、薄給はすべて生活費に消えてしまう。



異例の工場長抜擢



牛山は京城の苦難を教訓に、学歴や年齢に関係なく、誰でも頑張れば、夢が叶えられる会社を創ろうと思いついたのだ。

それは同僚から聞いた、「死ぬまでに一度でよいから、新品の背広を着て、腕時計をはめ、カメラを提げて、妻子で温泉旅行に行きたい」という、今では普通のはかない願いだった。

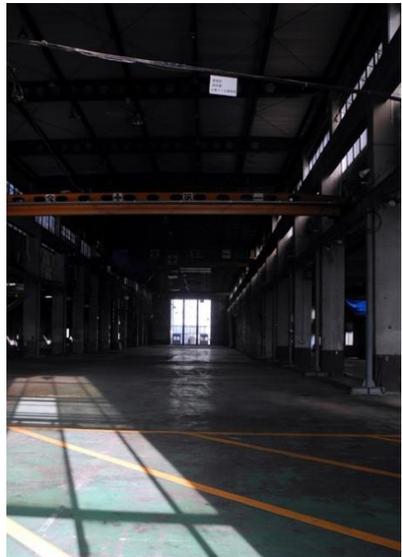
牛山は内地に戻り、「東洋バルヴ株式会社」という軍需工場に勤務する。上下の写真は諏訪市役所に隣接し、静態保存されている跡地だ。

(老朽化で解体予定だが、富岡製糸場のように復元を願うばかりだ)

軍部に係わる産業は、数少ない実力主義の世界だった。昼は先輩に寄り添って人の何倍も働き、夜は経済学の講義録を、大学から取り寄せて勉強に励んだ。そして20才を過ぎたころには、異例の工場長に抜擢される。

戦後になり、東洋バルヴの同僚らと8人で「八洲（やしま）精機」という時計会社を創る。電気を動力にした時計は画期的だったが、競争が激しいため、カメラの製造に転換したのだ。

その後は順調に業績を伸ばし、岡谷では8ミリビデオの製造のほか、いち早くカラーテレビの生産も計画した。



あとがき



1974年に始まったオイルショックは、日本全体に深刻な不況をもたらす。

ヤシカも経営危機に陥り、大規模な人員削減に踏み切るが、悪い出来事は重なる。

経理部長が横領事件で逮捕され、相模原工場では労使が衝突し、工場長が自殺を図るという事件も起きた。

牛山はプライベートでも、親族の麻薬所持などの問題を抱えていた。マスコミからの厳しい追求や、社員と株主からの責任を求める声には逆らえず、社長から会長職に退く。その後は経営からも身を引いた。

「希代のワンマン社長」と称された、牛山のなくなったヤシカカメラは、あっと言う間に衰退し、83年には京セラに吸収合併された。

牛山はめげずに87年には健康食品を設立する。その会社では元気がない男性に自信をよみがえらせようと、ユニークな補助器具を考案する。

独創性と論客ぶりは、晩年まで庶民の関心を集めた。

時代を切り開き、78才で昇天した彼は、人生に後悔などしなかつただろう。

もし今、彼が生きていれば、強靱な精神と柔軟性に富むハートで、失われつつある現代人の創造力に、「喝！」を入れるのではなかろうか。



栄枯盛衰を見た社



- ◆ 参考文献（国立国会図書館）
世界にあわせた焦点(アサヒ出版社, 1961)、
ボーイズライフ人物伝(小学館, 1963-11)他

- ◆ 写真・文・編集： 隅田 昭
- ◆ 撮影：平成29年6月 4日
- ◆ 発行：平成29年9月22日

本冊子の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、
法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。